

NEWSLETTER

AUG 2025

ISSUES #4

当社の旬な話題をご紹介します

大気社ニュースレター

発行元：株式会社大気社 経営企画部

広報・サステナビリティ推進課

連絡先：mailmast@taikisha.co.jp

技術で未来をつくる、愛川から — TISA開設1年 —

本号では、開設から1年を迎えた当社の開発拠点「TAIKISHA INNOVATION SITE Aikawa」（所在地：神奈川県愛甲郡愛川町、通称：TISA）をご紹介します。

TISAは長期経営計画「10年プラン2035」に掲げる技術戦略“Innovative Engineering”の中核拠点として、脱炭素やスマートファクトリーといった未来の課題に向き合い、パートナー企業との共創や実証による革新的な研究開発を着実に進めています。



当社の開発拠点「TAIKISHA INNOVATION SITE Aikawa」

共創が生み出す、新たな選択肢 技術と対話がつなぐ価値の創造

製品スペックや施工品質だけでは語りきれない「大気社の価値」を、どう伝え、どう共創していくか——。

TISAの狙いは、お客さまから「選ばれる理由」を現場と共に生み出す“共創”にあります。従来の自前主義の“内向き”ではなく、顧客と対話しながら課題やニーズを掘り起こし、それを技術で形にしていく——執行役員 事業開発本部 副本部長 兼 技術開発センター長の 大野は「建物そのものが実験場」（次頁に関連インタビューを掲載）と語り、空調設備では従来の発想にない空調機器の実証や吹出口の位置や風の有無など比較・検証しています。また、課題解決に必要な要素は社内外問わず取り込み、さがみロボット特区の地域性を生かした企業連携や大学との共創も積極的に推進。「“新技術の押しつけ”ではなく、困りごとに寄り添い、一緒に解決を探っていきたい」（大野）——共創を生む開かれたR&Dの姿がここに 있습니다。



追尾集光式太陽光発電システム

環境負荷低減を実現 TISAの最新技術

追尾集光式太陽光発電や採熱技術といった独自の環境技術を導入し、建物で使用するエネルギーを大幅に削減。ZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）水準を達成するとともに、建築物省エネルギー性能表示制度（BELS）において最高評価である★6ランクを取得し、環境負荷低減を実現しています。

研究現場の最新状況を一部紹介

「10年プラン2035」の実現に向けて

長期経営計画「10年プラン2035」における研究開発の中核拠点として位置づけられており、技術実証・共創・発信の機能を兼ね備えています。今後もこの場から、カーボンニュートラルに向けた新技術や、新たな「選ばれる理由」を創出する取り組みが広がっていきます。

快適性の先を探る—TISAの実証

TISAでは従来の空調とは一線を画す「安全で快適な空間」という共通のコンセプトのもと、施設内を活用して新たな空調技術の開発が進められています。来訪者との意見交換から新しい発想が生まれたり、大学機関とも連携しながら実証と改良が続けられています。

充実した共創の場

プロジェクトに応じて独立性やセキュリティを確保できる実験室や多拠点連携が可能なプレゼンルームでは、社内外のパートナーと共創が進められています。TISAは“開かれた技術開発拠点”として、革新を生む対話と実証の場となっています。



北海道三笠市での実証に用いたCO₂回収装置（写真左）や、人の動きを追跡して送風する吹出口FOLLOAS（写真右）など革新的な技術開発が進められている



室内全体を包み込むように冷却するユニット（写真左、破線内）の開発や床から局所的な気流を生み出す試み（写真右）など、室内の空間を最大限に利用して実証中



高天井空間を活かした実験室（写真左）と、多拠点連携が可能なプレゼンルーム（写真右）。部門や国境を越えた共創の場として開かれたイノベーションを推進

責任者が語る

「お客さまから選ばれる理由」を見つけたい

▶新宿のR&Dサテライト※と合わせて年間訪問者数が100組を超えているそうですね

— 1番の狙いは「お客さまから選ばれる理由」を一緒に見つけていくことです。これまでの研究拠点は、技術をつくる場所ではあっても



※東京・新宿R&Dサテライト施設「TAIKISHA INNOVATION GATE Shinjuku」。各開発拠点と中継し、デジタル技術を活用して当社の技術が体感できる

外に開く場所ではありませんでした。しかし、今は性能や価格だけでは選ばれにくい時代です。だからこそ、我々の技術や開発姿勢を実際に見て体感してもらい、対話の中から共感や期待を引き出すことが大事なんです。来所いただいて「大気社となら面白いことができそう」としてもらえたら、それが私たちにとってのスタートラインだと思っています。

▶若手エンジニアには自由な発想で考えることを大切にしているそうですね

— 楽しくなければ続かないし、自分が面白いと思えない技術は相

手にも伝わらないからです。だから「楽しそうに語れ」「相手の目を見て話せ」とよく言っています。今はエンジニアにも「伝える力」が必要な時代です。技術の価値や想いを伝えられてこそ、相手の共感を呼び、共創のきっかけが生まれます。オープンイノベーションを進める上でもとても大切なことだと思っています。



大野 裕二
執行役員
事業開発本部 副本部長
兼 技術開発センター長